

「藤森照信建築とこれからの盛岡」皆川氏発言録

皆川さん、そもそも、なぜ盛岡なんですか？

ミナペルホネンは、ファッションを中心としたブランド。1995年からやっていますが、盛岡との縁は私の姉や両親が滝沢市に25年ほど住んでいることから始まりました。自分も、故郷のようにお盆やお正月、GWなどに来ていたんです。その中で縁が生まれ、盛岡、岩手、そして東北の良さというものを知っていく中、今回の話を知りました。自分が外側から見つつ、家族が住んでいる場所としても盛岡を知るようになったのです。その良さを広げられるよう、外の人にも知ってもらいたい。それが最初にありました。また、一方で、僕らが知っていること、世界のものを盛岡に紹介することができたら双方にとって良い関係になるのではと、この事業に手を挙げさせていただきました。

ミナは、今回初めて「新築」の店になります。

はい。普段は地域に根ざす古い建物をリメイクして出店する形でやってきました。けれど、この場所に新たな建物をつくるという一つの条件がありましたので。ミナとして初めての試みになります。

藤森さんに依頼されたきっかけは？

藤森さんの建築物は、以前から自分でも訪ねたりしていました。あるいは京都の知人の寺の中にある茶室とか、実際に目にした経験も踏まえ、このプロジェクトは「公園の中で自然物と共存していく」建物がポイントになると考え、すぐに迷いなく藤森建築を閃きました。ただ、面識はなかったので、お手紙を書いてご自宅を訪ねて、まずはお会いしていただいたのです。

藤森建築を訪ね、特に印象に残っていること、具体的な希望は？

アイデアに一軒一軒面白いものがあって訪ねてみるのですが、それだけではない。建築は、訪れる人が好奇心を掻き立てられ、想像が膨らんでいくモノだと思います。藤森建築は、そこを訪ねて入った時、その時間全体を楽しかったときって思っていただけることになるだろう。今までの体験で感じました。それ

が頭にあるので、具体的に話していません。お伝えしたのは、僕たちはこんなことをやりたい、その理由は何か、目指すものは何か、自分たちがお客様をお迎えする意味みたいなものです。

プロジェクトのタイトル「ホホホの森」は、皆川さんがお考えになった？

どうしても、ダジャレに向かう年を迎えております（笑）。森という字は木が3つですけど、カタカナの「ホ」で3つに置き換えて、「ホホホの森」と名付けたんです。盛岡、岩手にある手作りの仕事にいつも感銘を受けていて、「本物」のものがある。人の労働たる「本質」的なものがある、ずっと受け継がれている「本来」的なものを、盛岡には感じられます。その3つ＝本物、本質、本来＝それぞれのホが集まって、一つの森のような状態になった場所が作れないかと思いました。盛岡の手仕事や工芸、農業に至って、人は働いている。いま、働き方改革など色々言われますが、本来的に「働くことは生きること」であり、とってとても大事な時間だと思うんです。そ子に自分を見つめるような仕事がたくさんあることを知っているので、きちんと伝えられるようにしたいと思って。今回は改めて名付けたんです。

藤森さんの素材の使い方にも惹かれた？

そうですね。自然の材料が自然の姿を残して、人間の住まいになっていることが、何より感動するところといたしますか。形をうまく生かしながらも一般的な方法論を超えてチャレンジしていくことは、建物を見てその技術や仕組みが分からなくても、何かエネルギーとして感じるはず。説明を聞かなくても建物がなんとなく佇まいとして伝えてくれる。それこそが、今回のプロジェクトにおいてとても大切な要素になるのだと思っています。

まさにミナノ服の作り方を辿っているようです。

きっと働く人にとっても、新しいことに挑戦したりできることが、次の自分たちの可能性につながるので、ものを作る際に有意義だなと思いますね。

今回のプロジェクトは藤森建築の東北第一号ですね

僕は岩手に帰ってくる時、水田の美しさを新幹線の車窓から眺め、いつも感じています。それと、時期によっては山に雪が積もったり、山下に桜が咲き、田んぼがあるとか。その日本の原風景が揃っている感じが、素晴らしいと思っていたので、水田のアイデアがとてもしっかりと思いました。自然と言いながら、まさに日本において「人が働いた証」のような気がします。水田の景色というのは、1個1個の人が田植えしているその営みの循環の代表のような気がしたので。それが景観にあるというのは、普段、この土地の方にとっては見慣れたものかもしれませんが。だから、改めて「風景」の良さを感じられたら素晴らしいですね。そして、生態系がそこに生まれると、子どもたちが集まるようになり、何か気づきになるとしたら、またさらにいいなあと。

皆さんで協働していくというやり方そのものが、今回のパーク PFI という制度に繋がっていくと思います。皆川さんは、そうした制度を知って今回のプロジェクトに手を挙げたのですか？

いえ、以前から盛岡にお店を作ってみたいという思いはありました。僕らは東京の店が100歳まで働ける制度になっていたり、いろんな世代の人が働ける仕組みを3年前から整えてきました。物販が一つの仕事の中身だとしても、その中には多様な仕事があります。東京で3年間順調に仕組みを作り、今は85歳が最年長で働いています。その経験を生かし、盛岡でもこの場で多様な働き方が作れないかなと。特に、盛岡にはいろんな生産者がいるので、顔が見える施設にもできると思っています。

施設の中身について教えてもらえますか？

盛岡には光原社など素晴らしいお店があって、海外のものも紹介しています。そういう場の大切さも理解しています。僕らは、洋服や家具などいろんなものをデザインしています。新たな商品もご紹介できたらいいなと思います。また、東京ではCALLという店があります。世界から様々なものを呼び寄せるという意味だったり、クリエイションホールという意味でもやっています。そういう

活動をこの地でもやっていきたい。ファッション、インテリア、食、また、アートギャラリーなど。暮らしに共感性を持てるものを紹介しつつ、カフェでその場の時間を楽しんでいただきたい。今回は、自分たちが、いらしていただく方に喜びを感じてもらえるものを選定していきながら、建築物が出来上がっていき、そこで立ち上がってくるイメージがあると思います。内装は外側や建物が持っている佇まいに沿って、心地よく寄り添えるようなものを考えていきます。

カフェは、建物を感じて景観を楽しんでいただく場です。公園との時間をつなげるものとして大事。東京の店で盛岡の野菜もいれさせていただいていますが、地元の美味しい食材を使っていきたいとも思います。

ギャラリーはどのような？

まだプランニング中です。地域、アジアの工芸、ヨーロッパのデザインとか、カテゴリーを決めて文化を見せていくような。季節に合わせた作品の展示、1か月に1回ぐらいずつ変わっていったらいいですね。岩手や東北に根ざしたものをやる時もある、遠く離れた海外のものをする時もある、いろんな紹介ができればいいです、内から外へ、外から内へと。

盛岡で特別にできること、ここだから可能なことはありますか？

ファッションに関しては「地域」ということではなく、その人の暮らしにあっていくの方が大事なので、地域性を考えて発信することはないと思うのです。盛岡はホームспанという手仕事が残る数少ない地域だと思いますので、それが一つの題材とも考えられます。むしろ、食や鉄器など、土地から生まれてきた工芸やクラフトのデザインなどは、地域性とともにお伝えしたいと思います。

建築イメージをすでに共有されているのですか？

まだです。ただ、思うのは、建築物はちゃんと経年変化してほしいということ。

植物の成長もそうですが、それによって、人が手をかけたり、改めて大事に感じたり、時の経過を感じたりすることが大切だと。洋服も、当社は全ていつも修理するようにしていますが、いつまでもピカピカというより、自然物らしい変化をしてほしい。植物も元気がなかったら、どうしてだろうって考えます。なんか、放っておくよりもかまっていける建物の方が、いいなあと思っています。

藤森さんと皆川さんはシンパシーを感じられるのでは？

ものが時間を少しずつ吸って、呼吸していくことは美しさの一つで大事なことです。以前、ミナで瀬戸内海の豊島に宿泊施設を作るとき、村人に集まってもらって幼稚園児から高齢の方などみんなでアワビの貝を外壁に貼ったりしました。すると、仮に小さな子が、そこを離れても、戻ってきたときに建物やものの記憶を、ちゃんと自分の記憶にとどめておいてくれる気がします。だから、今回も建物をつくりあげる中で、小さな子が参加できるしくみを取り入れて、あ、ここの部分を自分がやったなと後から思い起こせる、そんなことがあったら楽しそうだなと思いますけれども。

人の営みが見えてくるものを目指されているのですか？

そうですね。普段私たちは東京にいて、近くに誰が住んでいるのかわからないというのが普通になりつつある社会で、人がたくさんいても誰かは知らない。知ろうとしてはいけないという空気すらあるかもしれない。そんな暮らしの一方、岩手の両親がいる地域では、周辺の方々がとても温かく接している。それが、普段の自分の暮らしからすると、とても特別な贅沢な時間に感じます。この地に住まわれている方と、外から来た方との接点になりうるのだと思えば、交流の場、個人個人が楽しいだけでなく、お客様同士もつながるきっかけになったりすると面白いかなと思っています。

建築を進めるまでのプロセスを、市民とシェアしながら作っていききたいという思いがございますか。

一緒の意味は、ご意見を伺いながらということですが。僕らはこういうものをつくって欲しいというものをつくっているわけではなく、きっと今の暮らしにこれなら喜んでもらえるだろうという、ある意味「期待を超えたい」とおもって、ものづくりをやっています。その姿勢を崩したくはない。欲しいものを単に揃えれば良いということではなく、こういうことがあるといいのではないか、と考えながら進めたいなと思っています。